老いの病

五島 寛之

今年は東京で 2 回目のオリンピクが開催される。日本にとって大きな節目となり、また「子年」にもあたり、新しい十二支のサイクルがスタートする年である。

今回、7 回目の年男を迎え 83 歳となり、探求クラブ入会し２度目の年男を迎えることになった。

この年になると「老いと病は車の両輪」などと病の話題が出る折りが多くなった。病院には定期検査と診察を受けているが、現在のところ内臓疾患に関しては全く問題なく、医者いらずと強がっている。

しかし、視力の衰えは進み白内障も加わり運転免許は手放し、歯も顎関節症の治療中であり、聴力も以前に比べると聞き取りにくくなっている。時に、電車に乗ると「優先席」を譲られる事もあり、ショックも受けている。これらは正に老いからくる症状が徐々に迫ってきている証拠と思っている。と云っても特別な健康法をとっている訳でもなく、毎朝のラジオ体操と趣味のゴルフ程度で誤魔化している。

だが、5 年の永きにわたり続けてきた「ボイストレーニング」レッスンに終止符をうち、代わりに八十の手習いとして、今までとは真逆のイメージの「書」を始めた。書道には独特の緊張感のなかで、書いた後の心地よさは、体へのリハビリ効果が期待できるので、「書」は今後も挑戦し続けていく。

ラッキー・ボーイ

成瀬 義雄

両親が 60 代前後で早く亡くなり、私自身は 7 回目の誕生日を迎えようとしております。

歌の文句じゃないけど「ここまで生きてきたじゃないか」と、よく 84 歳まで生きてきたなーと思っています。思うと苦しい時、難しい時にラッキーの面に遭遇したと思います。いくつもありますが主なものを箇条書きにあげてみます。

まず、①生まれた年がよかった。二・二六事件の年に生まれたが 5、6 年早ければ少年兵に駆り出され戦場に。②実家(東京都心中央区)が空襲を奇跡的に免れ、縁故疎開先（静岡市ほぼ全焼）でこれも奇跡的に生きた。③新婚で大阪に転勤し東京しか知らないため休みごとに京都に遊び、次に名古屋に飛ばされ 10 年、名門ゴルフ場のメンバーとなり関西圏名古屋圏の空気を知った。④バブルを実体験。妻の持参金で買った実家の土地が数千倍に化けた。⑤九州大分の会社（出向し東京勤務）に定年まで 10 年。九州全県を知った⑥定年後海外ロングステイを考え数か国にショートステイし結果的に世界 40 か国を旅した。最後に⑦鵠沼の地に引っ越し探求クラブに入会した。

温暖の地に住みお金の心配もなく子供3人も無事独立し私共二人も大病を克服し今は安穏に生きています。

辛い事や苦しい事はたくさんあったがすべて忘れてラッキーな事しか覚えていません。

今や探求クラブをよりどころに余生を生きてゆくつもりです。

私、年男です

西野 行

「くげぬま探求クラブへ入会したのは平成 12 年 12 月だったので、今から 19 年前のことになる。当時私が所属していた「江の島観光ボランティアガイド」の先輩で、探求クラブの会員でもあったA氏から「くげぬま探求クラブ」へのお誘いを受けた。A氏によると鵠沼に男性のみのクラブで内容は「自分がやりたいこと」を「やりたいとき」に「やりたいだけのこと」をする。唯一の会員の条件は「ボランティア活動」に一つ以上参加することということで、ちょうど私も地域のボランティア活動を探していたところでもあり早速探求クラブに入会を申しこんだ。当時の探求クラブは会員が活動しやすいように、各部会毎に名簿は作らない、会費は費用が発生した都度参加者が負担する等くげぬま探求クラブにもこんな試行錯誤の活動の時代があったのです。

私も今年は 7 度目の年男で 84 歳になる。本来ならば探求クラブの一員としてクラブの活動に参加したいのだが体調を崩していて活動に参加出来ない。目下クラブを休会中で、誠に申し訳ないが「年男登場」とはならず残念である。

クラブ短信

１．新部会「おひる探Q会」発足

2019 年 3 月で解散した「お菓子の会」を一部変更して 12 月に新部会として復活した。ワンコインで季節の食材を使った和風の昼食を作って食べながら歓談を楽しむ。部会長は発起人の鈴木英紀さん。

２．片瀬小学校うぐいす笛作り指導

17 回目となった 4 年生へのうぐいす笛作りに当クラブから 14 名が指導者で参加し 10 月 31 日に行われた。

３．サンタの出前

鵠沼公民館、鵠洋児童館、ひょっこり鵠南島で恒例の「サンタの出前」が行われ、サンタ役と介添え役がクリスマスプレゼントを幼児に配った。鵠洋児童館ではヤングハーツの伴奏でクリスマスソングの合唱を楽しんだ。

令和初の正月に

井上 忍

年男で迎える令和初の正月には「エンディングノート」を作成しようと思っている。

一昨年、長期の海外旅行をするに当たり、万が一を考えて「エンディングノート」を作成しておこうと、茅ケ崎市のホームページより「私の覚え書き」をダウンロードした。

大項目には、①私のこと、②健康のこと、③介護のこと、④後のこと、で総計 25 ページあり、別冊として⑤財産のこと、から構成されている。

②～⑤は、既に決めている事や資料が在るので簡単だが、「①私のこと」の小項目「思い出」は厄介である。

前回完成出来なかったのはこの項から書き始め、多くの思い出を取捨選択出来ず時間切れで旅に出たからだ。

今回は、この項は別冊にし、自分史として日々追記するつもりだ。

84 才の誕生日をむかえて

杉山 和彦

この 1 月で 84 才の誕生日を迎えることになりました。

「くげぬま探求クラブ」結成の募集に誘われて 20 数年。その間、子ども達と昔遊びで交流し、お年寄りを訪問して一緒に歌を唄って交流を深めたり、大きなエネルギーをもらったりで大変楽しい時を過ごしました。

一方では自分の趣味として、引地川、境川の水源から川を下ってその汚れ度合いを目にし、相模湾を城ヶ島から真鶴の突端まで1年かけて海岸伝いに歩き、色々体験をしました。また、60 才から山登りを始め、北アルプスにも出かけて槍ヶ岳に登ることが出来、いい仲間に恵まれて素晴らしい経験ができ、感謝しております。

でも年令には逆らえません。特に 80 才を過ぎてからは怪我をしたり、物忘れもあり、今迄のように無理は利きません。世の中をスローで生きていければよいと考えています。

シリーズ

我が家の災害対応作戦（その 2）

米倉 貞敏

「なんで雨戸を締めなかったの。信じられない。昨夜は激しい雨と風で部屋が揺れて眠れなかったの・・」9 月 9 日（月）台風 15 号が去った朝 4 時、女房は絶叫する。僕は南側に寝ていたのでトイレに起きた時は台風で雨や風が吹いていると思って熟睡していた。台風は予想通りの大型で 8 時に家を出て鎌倉の店に到着したのは 11 時半を回っていた。ようやく鎌倉の一部の停電が解消されたころである。普段は一時間の距離である。

我が家は湘洋中学校前の海抜 2.9m、海岸まで 300 m。津波が押し寄せたら逃げずに自宅の 2 階で待機、救援を待つ。災害の準備は携帯の電気スタンドと当座の食料と水ぐらいである。

10 月 12 日（土）大型台風 19 号接近、避難指示が出た。女房はおむすびを作り避難準備を始めた。Line で子供達に発信「避難場所は湘洋中学校ですがお父さんは頑固として行かないとの事、二人で台風が過ぎるのをひたすら待ちます」直ぐに娘から電話がくる。「お父さんお母さんお願いだから避難して、避難場所の写真を送って・・」

3 時頃おむすびを持って湘洋中学の 3 階へ、畳の部屋には 30 名ほど集まって毛布を受取り適当な場所に陣取っている。食事をとる家族、横になる人、小さな子が飛び回っていた。トイレは広く清潔で壁はきれいな青い色だった。

僕はこの時をチャンスに本を読み始める。激しい雨がガラス窓を打つ。スマホが 5 時頃伊豆半島を通過したと伝えた。短い停電が 2 回ほどあった。もしも、瓦が窓を破り吹き込んだ風が天井を持ち上げ、やがてコンクリートの建物が倒壊し圧死するのだろうか。押し寄せる危機に自宅の 2 階で安楽死など空想であることに気がつく。

一週間の避難生活を考えてみる。何を食べるのか、水だけで断食、断酒が出来るのか。3 月の交通事故以来右足が痛み長い距離は歩けない。体力は大丈夫か。どこでも眠れるか運動不足解消のトレーニングをしておくべきだった。

避難生活を如何に愉快に楽しく過ごせるか。避難場所で周りの人たちと協調して何かお役に立てることはないか。個人的には暗闇の中で楽しい俳句を作る。歌を心の中で歌う。「高原列車」「ラメール」「翼をください」など暗譜をしなければならない。楽しい思い出を追憶する。子供達と家族旅行した事など、写真を整理しなければならない。人生 100 年時代。残るはあと 24 年は何とも淋しい。今が人生の折り返しと考え人生 150 年と想定すればまだまだやれることはある。明るく愉快に災害対策を考えてみよう。

台風 19 号は 9 時に町田を通過。しだいに風雨が弱まり 10 時に帰宅した。

地域活動部会紹介

おもちゃの病院

池田 雄一

病院の開院は 1998 年、今年で 22 年目になりました。こちらも歴代のドクターが積み重ねてきた部会です。

数々の苦労エピソードについてはその都度 HP にてご紹介していますが、ここ数年では「愛犬テツ」の入院物語、神奈川県立こども医療センターからの感謝状授与、湘南シニアネットへの出演、J:COM チャンネル神奈川による取材放映と、地域の皆様に認知されて多くの方々に喜んでいただける活動に定着してきたと自負しているこの頃です。

修理受付も新しい管理方式を始めてからですが、2014 年 7 月に 1000 件、2018 年 2 月に 2000 件と数を重ね、現在では 3000 件に近づきつつあります。この数だけ来院された皆さんの喜びと病院に携わるメンバーの喜びの笑顔があります。

最近のトピックスはインターネット HP にも記載しましたが、ドクター冥利に尽きるメッセージが寄せられたことです。

それは、骨折したネコのおもちゃを持ってきた女の子からの手紙です。

修理の際入院が必要だと話したところ、とても悲しそうにしっかり抱きしめてからお別れして帰りました。それを見ていたドクターはとにかく最優先で治してあげなければと取り組み完治して退院していきました。ほどなくして右上のような手紙が送られてきました。

もう一件は、探求メンバーがお友達で、辻堂にお住まいの女性の方から扇風機付霧吹きの修理のメッセージです。（長文につき若干抜粋させていただきました）

「我が家には夏に夢の国で買った扇風機付きの霧吹きがあるのですが、ファンが回らなくなってしまい、ドクターに見てもらいました。一瞬で接触不良を見抜いてくれ、金属部分をヤスリで擦ってもらい、あっという間に治りました！　また、大好きなキャラクターのプラスチックのフィギュアも持っていきました。使い方が荒く、頭部分が取れてしまい嘆いていたのですが、専用の接着剤（しかも新品！）を下ろしていただき接着し直してもらいました。
おもちゃの病院は初めて伺ったのですが、ひっきりなしにお客さん（患者さん）がやってきていました。探求クラブのドクターは、どんなオモチャでも魔法使いのように解決法を見つけて治していて、ただただ感動でした。凄腕のドクターが沢山いらっしゃる、このような素敵な場所が地域にあるのは、本当に心強いです。少しでも長く遊ぶことができる、このオモチャの病院、あまりにも良いので、周りにもすすめています。そして、不謹慎ではありますが、またお邪魔したく「オモチャ、何か壊れないかなー」と思ってしまう自分がおります（笑）
探求クラブは、地域に根差して活動をする様子が鵠沼地域の様々な場所で垣間見ることができ、その存在自体が本当に素晴らしいと思っています。」

おもちゃの病院のドクター達にとっては、治ったおもちゃを受け取るときに思わずこぼれる子ども達の笑顔やこのような励ましのメッセージをもらうことが最上の治療代となっています。これからも、地域の子供達はじめ皆さんの喜ぶ笑顔と声を糧に病院関係者一同頑張ります。ご協力よろしくお願いします。

くぐひ100号によせて

歴代編集長の記　創刊からの編集人が思い出を綴りました。

なぜ「くぐひ」と名付けたか

磯川 道夫

くげぬま探求クラブの会報「くぐひ」が今号で100号になった。年4回発行の季刊誌であるから、創刊以来25年を経たことになる。その間一度も休刊していない。これは会員各位がその時々に原稿を寄せ続けて下さったお陰だ。

私は初代の編集長として17号の発行まで都留務めさせていただいた。

会報「くぐひ」の創刊は平成7年4月1日。当時、私は、パソコンを持ってなくて、東芝のワープロ「ルポ」で版下作りをした。誌面はA3用紙を二つ折りにして4ページ建てとした。「ルポ」には版下に写真やイラストを入れ込む機能はなかった。にもかかわらず白鳥などのイラストが4カット入っている。これは文字を打つとき、あらかじめスペースを空けておき、適当な大きさにプリントしたイラストを版下に貼り付けたのである。そして近所の印刷会社に必要部数印刷してもらった。

会報名の「くぐひ」は旧仮名遣いで、白鳥の古い呼び名であり、「クグイ」と読む。鵠沼は、平安時代「鵠沼郷(くぐひぬまごう)」と呼ばれ、白鳥が沢山飛来したと伝えられている。そうした故事に意義を感じ、「くぐい」とすべきだとする意見もあったが「くぐひ」と書き「くぐい」と読んでもらうことにした。

第二代編集長 故・池田 睦さんを偲んで

北岡 慶太郎

池田睦さんは平成7年5月に当会に入られ、暫くしてから編集会議に顔を出すようになったと記憶している。当時は編集人諸氏の都合で藤沢市役所の会議室で開催していた。

池田さんは平成11年の組織改編を機に初代磯川道夫さんに替わり第二代編集長就任し、病気により退かれる平成13年10月(くぐひ27号)まで編集に携われた。

執筆した記事は「湘南かわら版」(9号)などに「滴子」の名で8編の寄稿が見られる。

池田さんは埼玉新聞の編集長を務められた経験があり、編集会議では用語の使い方、句読点など細かく指摘、指導されていたのを記憶している。

趣味の一つに、時刻表の蒐集があった(湘南かわら版12号参照)。戦後の国鉄時刻表を中心に多くの資料を蒐集していたようである。

池田さんとの会話の中で、幻となった1940年の東京オリンピック時に計画された、ベルリン～東京間の大陸横断鉄道に話が及び計画された時の時刻表とその資料のコピーを頂いた。

惜しくも平成14年3月に死去され享年72でした。

最後の寄稿は、くぐひ28号「早く元気になって地域社会に役立ちたい」(平成14年1月)。

中継ぎ編集人のつぶやき～創立10周年前後

鈴木 英紀

平成13年（2001年）9月、編集会議のあと、編集長の池田睦さんから唐突に近々検査入院するので編集人を引受けてほしいと言われた。クラブ随一と言われる実直な方からのお話をお断りできるはずはない。初代の磯川さんはじめ編集メンバーの皆さんにご指導、協力をひたすらお願いすることになった。ちょうど公民館主催「地域ミニコミ誌の作り方」講座（月1回・全10回　のちに「ぶらり鵠沼」発刊）に参加できて、編集の初歩をじっせんてき実践的にひと通り勉強する機会を得て大いに助けられた。

創立10周年記念行事(平成15年4月～同16年3月）が終わって、発行人（世話人代表）が長谷川さんに交替し一段落ついたところで、嶋村さんがタイミングよく手を挙げてくださった。お陰さまで、28号（平成14年1月発行）から42号（同17年7月）までの3年半、15回の「編集後記」を担当して、中継ぎ編集人の任期を終えることができた。

バックナンバーを繰りながら記憶をたどってみた。

27号のトップ記事の見出しは、「わかり易く、参加しやすい組織に」である。当時分科会と委員会が入り組んでいたのを、それぞれ活動実態に即し思い切って地域活動部門と親睦･研鑽部門の2区分とした画期的な組織改革を報じている。クラブ運営の中枢部が運営委員会から世話人会へと移って、世話人の任期も1期2年交替となった。このことは現在に至るまで継承されてクラブ運営の根幹をなしている。

創立10周年記念行事のひとつ、くぐひ編集部が担当した記念特集「私のこの10年」には、当時の全会員55名（うち現在籍者15名）が原稿を寄せている。部会数も19部会を数える。平均年齢も60代後半ではなかろうか。また、クラブ史「10年の歩み」の編集作業には、毎号の『例会・委員会・各部会活動報告』欄が貴重な情報源となっていた。そのころ